

知夜古朽木

もうとつくに夜用の明るさになってしまったカーナビのディスプレイに目をやった。二十三時半、もういい時間だ。ワイパーが窓をせわしなく擦り、懸命に雨粒を落としていくが、たいして意味はない。早く家に帰ろう。

「ねえー、そおーくん」

助手席のミイが猫なで声を出しながら寄りかかってくる。彼女とは付き合って六年ほどになる。何度もくついたり、離れたりを繰り返したが、俺には彼女以外ない。可愛いやつだ。

「なんだよおー」

何をするでもなく、ハンドルから手を放して、指を絡めてみたり、腕を組んでみたり、脇腹をつつきあってみたりしていた。彼女はこのような意味のない絡みを好んでしてきた。ときにはウザったいが、そこも魅力のように感じる。

ここにはドライブに来ていた。まあまあ遠出したため土地勘はあまりないが、見た感じ田舎道で、舗装されてはいるものの人通りは多くないといったところだった。多少荒い運転だろうと見咎める人はいない。こんなどしやぶりの中、警察が検問などやってはいないだろうし、カドで違反切符を切ろうと待機している時間帯でもない。雨は勢いを増して、前はほとんど見えなくなっていた。信号機の赤を見落とすほどに。

ミイを見ていた視界の端に黄色い傘が写った。

「ヤベッ！」

組んでいた腕をほどいて慌ててハンドルを切ったが、もう遅かった。

ボン！

思っていたより軽い音を立てて、黄色は数メートル先に吹っ飛んでいった。車の中に置きっぱなしにしてある

ビニール傘も持たずに、急いで車外に出た。水浸しの道路には、小さい、小学低学年ぐらいだろうか、女の子が仰向けに転がっていた。生きているように綺麗な顔は、この豪雨に瞬きもせず、黒雲を睨んでいた。後頭部から、白い点と赤い円が広がり、水の溢れた側溝に流されていく。今っぽい水色のランドセルは肩紐が千切れて、より遠くまで飛んでいた。それについていたのだろう、手作り感のある女の子の人形も横に転がっていた。

「……」

声にならなかった。いろんな事実、疑問が頭の中をぐるぐるに流れていく。俺が轢いてしまったのか。なんでこんな時間に。警察に電話。捕まる。殺してしまった。この時間に女の子一人。この後どうなる。俺が轢いた。会社はクビ。俺が轢いてしまった。刑務所行き。どうして。どうして。どうしてこんなことに。

「行くよ」

ミイが急に俺の腕を引いた。

「行くってどこに」

「今ならだれも見えない。こんなド田舎で、雨で遠くからだっただけ見えないうし、音だっただけ聞こえない。監視カメラなんてあるわけない」

「でも」

「捕まらたくないでしょ！」

俺は彼女の気迫に押され、運転席についた。ヘッドライトが死体を照らす。さつきと変わらず、大きい雨粒が女の子の頬を伝っていた。本当に泣いているようにも見えたが、そんなわけはない。一匹の雨蛙が顔に乗った。

ハンドルを横に切って、急いでその場から離れた。

最悪の夜だった。

*

「おっ」

雨粒が顔に当たった。何の気なしに声を出してしまった。悪い癖だ。直したいとは思っているが、無意識に出しているためか、難しい。朝のニュースでこちら辺は強く降るといつていた。正直、天気予報など半分も信じていなかったが、今日は信じて傘を持ってきて正解だったようだ。

「たまにはやるじゃあないか」

黒地の蝙蝠傘を開いた。今日は契約している工場へ出向しに来ていた。工場は首都圏から軽く外れた田舎に位置し、交通の便はお世辞にもいいとは言えない。生産ラインの機械が不調だということで、点検したのだが、大きい故障は見られなかったため、軽い部品交換を行って仕事を終えた。その後、工場の職員にほかに調子の悪いところがないか聞いて回って、今、一七時過ぎといったところである。

大きい破損とかがなくて本当に良かった。ここからだと帰るのは大変で、ここに来るために乗ったバスの本数もそこまで多くはなく、深夜は走っていない。タクシー代だってバカにならない。経費で落とせるが、経理からの目が痛いから助かる。

信号のある交差点横のバス停についた。行きもここで降りていた。バス停横についた小さい屋根の下で、バスを待っていたら、信号機に立てかけられた看板といくつかの花束が目に入った。行きは気づかなかった。看板には、

お願い

目撃者を探しています

6月×日午前23時30分ごろ

乗用車と児童の交通事故が発生

情報提供をお願いします。

〇〇警察署

とある。

「そういうえば」

工場の人が言っていたことを思い出した。最近こちらで轢き逃げ事件が起こったらしい。女の子が塾の帰りに、交差点を渡ろうとしたら、すごい勢いで突っ込んできた車に撥ねられたそうだと。言っても見た人はおらず、そのような状態であったということしかわからない。交差点から十数メートルも離れたところまで飛ばされており、いくら軽い小学生の女の子だからといって、そこまで飛ばされるとは、だいぶな速度で走っていたのだろう。

凄惨な事件である。この看板からも分かる通り、まだ轢き逃げ犯は捕まっていないそうだ。

「この交差点だったのか」

今どきの子はそんな遅くまで塾にるのが普通なのだろうか。両親は迎えに行けなかったのだろうか。犯人は今ものうのうと生きているのだろうか。今ここで、自分がそれを考えてもしようがないが、供えられた花束やジュースのバック、お菓子をみて、思わずにはいられなかった。

雨脚が強まってきた。牛乳のような雲は、だんだん黒く染まってきた。あちらこちらから、田舎特有のカエルらの合唱が、雨音に負けず響く。腕時計をちらっと見てみた。バスが来るまであと二十分くらいだ。それまでは、このコンサートに付き合うしかないようだ。

ザンザンと雨が降り注ぐ。側溝にはもう水が溢れかえっていた。

「こんな降るとは言ってなかったんだけどなあ」

やはり、天気予報はそこまであてにはならない。雨を

当てただけすごいとおこらう。

そう思った矢先、周りが暗くなってきた。太陽がもう落ちたのだろうか。雲に隠れて何もわからないがそうなのだろう。日が長くなったと感じていたが、とは言ってもまだ六月か。

ゲゲゲゲゲ ゲゲゲコ

カエルの声が一層大きくなったような気がした。時計をまた見た。さっきから五分しか経っていない。

ゲゲゲコ ゲゲゲゲゲゲゲ ゲゲゲコ

風まで出てきた。雨粒が目当たってまともに開くことができなくなってきた。すでに傘は役に立たない。雲がとてつもないスピードで過ぎていく。

ゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲ ゲコ

空を見上げた一瞬、黒雲が裂け、満月が見えたような気がした。何かがおかしかった。空はタイムラプス映像のように高速で流れていく。まるで時間が飛んでいるようだった。道路はほとんど川のようになっている。

ゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲ

信号機の赤が何かを照らした。人形のような。一昔前のようにおっぱいで、水色のワンピースを着ている。

何も考えずにそれを取りに行った。もう何をしていいかわからないほど、目の前の光景に、雨の音に、カエル

天井をライトで照らした。そこには岩が、いや、カエルが張り付いていた。無数の疣贅、何色とも言い難い粘液、体の半分はあるんじゃないかというほどの口、飛び出た二つの目、一文字の空虚な瞳孔がこちらを見つめる。しかも、一匹だけじゃない。一メートル強台のカエルが

十はいる。蛙の種類には詳しくないが、緑色のものもあれば茶色いものもある。ポトツ、ポトポトツと床に落ちてきた。僕は蛙に睨まれた蛇のように動けなかった。こちらにノソノソとにじり寄ってくる。ひととき大きい一匹がその

ヌラヌラとした四つ又の手を僕の肩に掛けた。
「ゲ、ゲゲ、ヨグ……、ぎ……、だナ……、ゲツ」

僕の中で何かが切れた音がした。半ば扉に体当たりするのように転がり出た。道が消え、濁った水しかなかったが気にせず、掻き分け、走った。

ビタンツ、ビタンツと後ろからヤツラが跳ねて追いかけてくる音がしたが、後ろは振り向かずの前だけ見て走り続けた。しかし、水の中ではヤツラの方がいる。

一匹が大きく跳躍してきた。その手をなんとか体を捻って避けたが、そんな抵抗も空しく、追い込まれ、周りを囲まれてしまった。

もう終わりだ。終わったということだけはわかった。力が抜けて、懐中電灯を水の中に落とす。ヤツラの無数の影が、ボンヤリと浮かび上がる。忙しく半球の眼をギョロギョロ動かしているようだ。

謝ったら許してもらえらるだろうか。そんなバカなこと考えた。いったい何を謝るといふのか。天井にまで張り付いてこちらに寄ってくる。視界が緑と茶色で埋まる。僕の足元からポコポコと水泡が上がってきた。下から食われるのだろうか。しかしそんな予想は外れ、浮かん

できたのは人形だった。あの、こんなことになる前に見た水色のワンピースを着た人形である。

「ゲゲゲ、ぞレ……、だ……、ゲツゲツゲツ」

ヤツが何か呻いた。

よく見ると後頭部が裂けている。手を当てると何かがコロツと出てきた。小さい金の蛙だった。

「なんだこれ」

こんな状況でも悪癖は止まらない。それにしてもこれはなんだ。……お守りに入っているやつか？ 罰当たりにも昔、お守りの中身を出してみたことがある。中身は小さな金の狐だったかな。それに似ている。

また水泡が上がってきた。今度は大きい。……手だ。カエルの四つ又の手じゃあない。指が五本ある人間の手だ。藻がビッシリ絡みついていて。手が小さいことから子供のようだ。続いて黒い頭もゆつくりと上がってきた。

顔は少女のようにあどけなさを漂わせているが、生気がなく、真つ白である。腕と対照的に藻は全く付いていない。目は固定されたように一切動かさず、瞬きさえもしない。濡れたおかつぱの黒髪がペツタリと額に張り付いている。後頭部から白い脳漿と赤をバタバタと垂れ流して、水に円を作っている。

僕はその、女の子が浮かび上がってくる様を見ていることしか出来なかった。恋人のように首に腕を回して抱きついてくる。藻が首筋に当たり、冷たいがどことなく気持ちいい。

「見つけてくれて……、ありが……どう……」

か細いが、鈴のなるような可愛らしい声でそう告げた。最後には横顔しか見えなかったが、その動かない瞳孔は一文字の形に見えた。

僕の、あたしの体に光がめり込んだ。何が起きたかわからなかった。どうして。どうして。空を見たままもう眼は動かない。握りしめたはずのお守り、人形はもう手の中にはなかった。頬に伝う涙だけがわかった。

目が覚めると、都内の病院にいた。僕はあの交差点に倒れているところを、バスの運転手に見つかり、救急搬送されたが、診察の結果、頭を強打していることから、次は施設の整った都内へ運ばれ、今に至るらしい。

精密検査の結果は特別異常ないようだが、数日入院することを勧められたため、大人しく従うことにした。こうして、公然と仕事をサボることに成功したのだ。あの

出来事は医者には話していない。馬鹿にされたらまらない、検査が増えるのもごめんだ。それにしても、あれは本当の出来事だったのだろうか。あの日の降水量を調べたが、天気予報通りに、そこまで大雨にはならず、マンホールが外れるほどは降っていなかった。

あの出来事があつたことを確定させるわけではないが、僕は倒れているときから、人形を握って絶対に放さなかつたらしい。医者に子供趣味だと思われたらうが、あれの前ではどうでもいいだろう。もし、あれが本場で、あんなどにかい蛙がこの世に存在しているなら、二度と会いたくはない。

僕はベッドのサイドボードに置いた人形に目をやった。それは忽然と消えていた。確かに置いたはずなのに、おかしいな。カエルはともかく、あの女の子に会えないのは少し寂しいな。

遠くで何かがぶつかるような音を聞いた気がした。

